

キリマンジャロの雪が消えていく —アフリカ環境報告—

石弘之 著

「キリマンジャロは、高さ6076m（当時使われていた標高・現5895m）、雪におおわれた山で、アフリカの最高峰と言われている。その西の山頂はマサイ語で“神の家”と呼ばれているが、その近くに、ひからびて凍りついた一頭の豹の屍が横たわっている。それほど高いところで、豹が何を求めていたのか、説明し得た者は一人もいない。（略）前方の視界いっぱい、さながら全世界のように広く、大きく、高々と、信じがたいほど真白に陽光に輝いて、キリマンジャロの四角い頂上がそびえていた」（ヘミングウェイ短編・高見浩訳より）。本書は、これ程、稀代の作家ヘミングウェイにその美しさを称賛されたキリマンジャロが急激にその姿を変えつつあることのみならず、人類の故郷とも言えるアフリカ大陸全体が危機に瀕している実態を記した新書本である。

本書の冒頭を引用すれば「アフリカを語るとき（愛）と（憎）がない交ぜになった複雑な感情がこもる。天空を染めた豪華な夕焼けや朝焼け、満天の星空、網膜まで染まりそうな青空、大草原を駆け抜ける動物たち（略）純朴な村人との生活、黒い瞳が輝く子供たちの笑顔（略）思い出だけで心のうずくものがある。これが（愛）の部分である。その一方で、絶望的な貧困や疫病の大海原が広がる。『最大の暴力は貧困である』とのマハトマ・ガンジーの言葉が、この大陸では格段の重みを持つ。私腹を肥やす権力者、賄賂を要求する役人、容赦ない犯罪者、病院の通路にまではみ出したエイズ患者・これは（憎）の部分である（略）」となり、雄大で

変化に富む自然を持つアフリカが、温暖化などの影響で急激に環境が悪化している実態を捉えている。

積雪量が減り頂上の氷雪が消えようとしているキリマンジャロ、氷雪の厚さが30mもあったものが今では10m以下に縮んでいる。野生動物は食料として供される為（ブッシュミートと呼ばれ密売されている）に激減し、ライオンなどは保護区でしか生息できず、野生本来の姿を目にした事のある現地人すら皆無に近いなどの実態が記されている。

急激な人口増加とそれに伴う都市化・計画性のない工業化・過剰な農業開発などによる森林伐採がその自然環境の劣化と消耗を促進させている。牧畜すらままならない人々に、野生動物を捕ってはいけませんなどと、誰が言えるのだろうか。

著者の石弘之氏は大学で教鞭を執る傍ら、特命大使などの命を受けアフリカ大陸に歩をはこび、氏の目を通したレポートとして纏められている。アフリカ大陸の変遷を30有余年にわたり目撃し、心に涙した心情も連ねてある。氏は最後にこの様に述べている。「アフリカの悲惨な現状は分かったが、ではどの様にすれば良いのか。暗い話しばかりでもっと明るい話しはないのかなどと質されることが多い。その気持ちも痛いほど分かるが、貧困や環境破壊の大波に翻弄されるアフリカを救い出す特効薬は、これまでのところ見つかっていない。（略）『アフリカは世界史から消えつつある大陸』と書いたのはワシントンポスト紙だが、私たちの意識からアフリカを消し去ってはならない」

古希を過ぎた著者にとって、頼みの綱はこれからの若者である。工業高校で培った技術と精神力をもって、現状を打破する人材が生まれることを期待している。

（岩波新書、226頁、780円＋税）（毛利 昭）